

校長室だより
NO. 25
令和元年9月12日

すべては光る

梅園小学校長
たか すりょうへい
高 須 亮 平

梅園再発見 32 ～世界的な青銅鑄造師・安藤金得の業績と後継



安藤金得の銅像

「校長室だよりNO. 17」（7月8日）で、梅園学区の祐金町とその産業として盛んであった鑄造業について紹介しました。江戸時代から明治・大正時代に、祐金町には鑄物師として安藤家と木村家の2家が存在し、岡崎とその周辺での鑄物産業の中心として大いに活躍していました。

特に、安藤家第26代・安藤金得は、左のような銅像が戦前まで随念寺に存在したと言われていました。その銅像は、大正6（1917）年6月に、当時の岡崎市長の千賀又市、岡崎市青銅技術奨励会長の本多憲の名により建てられました。それほど活躍をした人物がいたのです。その銅像の銘文から、安藤金得の功績について分かりますので紹介します。

安藤家は、伏見天皇の正應2（1289）年、満性寺開基の了専上人とともに、河内國丹南（現・大阪府狭山市周辺）から三州岡崎菅生郷（現在の満性寺周辺）に移住してきた鑄造師3人のうち1人と言われていました。そして、安藤金得に至る26代の間、安藤家は代々連綿として鑄造業に従事してきました。江戸時代は、岡崎藩の御用鑄物師としてその巧みな技術を讃えられていました。その頃は、既に祐金町に移っていました。その間、安藤金右衛門をはじめとした優秀な鑄物師が出現して、その家名を高め、名声は広がっていました。

安藤金得は、天保12（1841）年2月22日に生まれ、安藤家の26代目となりました。金得は、青銅鑄造の特技を発揮して、銅器の火鉢をフランスのリヨンにおける博覧会（1878年）に出品し褒賞を受けました。そのように日本の鑄物技術を海外にまで誇り、認められています。なお、1878年の博覧会は銘文にはリヨンとありましたが、記録としてはパリ万国博覧会ではないかと思われま



安藤金得の万国博覧会出品の火鉢

この博覧会では、グラハム・ベルの電話機やトーマス・エジソンの蓄音機、自動車などが出品されるなど、当時の各国の画期的な発明品がいくつも出品されています。金得の作品もそれに勝るとも劣らない素晴らしい評価がされたのです。そして、岡崎市の青銅器鑄物の優れた技術を世界に広めたことから、鑄物業功労者の一人にあげられました。まさに岡崎市青銅器鑄造業中興の祖と言われて



パリ万国博覧会(1878)

金得は、明治18（1885）年12月28日に病で亡くなりました。享年45歳で

した。金得の子の元太郎は、金得がフランスでの博覧会で活躍したこともあり、ヨーロッパ遊学をし大いに後継として期待されていました。しかし、虚弱にして早く世を去ってしまいました。これにより安藤家は断絶してしまいました。なお、金得の銅像と銘文は、現在は随念寺にはありません。たぶん戦争で供出してしまったようです。

ここで、安藤金得の影響を受けた弟子は多くいると思い調べてみたところ、顕著な活躍をした2人の人物を見つけることができました。まず、1人目は三浦作次郎です。作次郎の銅像は、極楽寺（中町）の山門を通ると、右のように見られます。そこには銘文が刻まれていて、その内容から金得とのつながりが分かります。これは、作次郎死後すぐに建てられたようですが、戦争により供出され、昭和36（1961）年11月5日に岡崎青銅器組合により再建されました。それでは銘文から三浦作次郎を紹介します。



三浦作次郎の銅像

三浦作次郎は、文久2（1862）年12月20日、両町に生まれました。幼少のころ安藤金得に師事し、唐金（青銅器）鑄物の技術を修得し21才で青銅器鑄物の事業を起こしました。優秀な技術と人徳で、多くの作品と有能な子弟を育て、世に輩出しました。明治28（1895）年、唐金鑄物組合の創設に尽力し、大正から昭和には、岡崎の青銅器が全国的に名声を博すほどになりました。それは作次郎の功績によるところが多くありました。作次郎は大正15（1926）年8月24日、64才で永眠しましたが、その徳を称えて青銅組合員が皆で計画し銅像を建立しました。しかし、戦時中に供出したため、昭和36年、三浦織三郎の発起により青銅器組合が再建しました。作次郎の両町と金得の祐金町との距離が近かったことからのつながりでしょうか。金得から作次郎に青銅器鑄造の技術が受け継がれ、確かな発展を果たしたようです。



服部太郎吉

2人目は、現在の服部工業（岡崎市羽根町）の初代服部太郎吉です。太郎吉は、蔓延元（1860）年に岡崎の農家に生まれ、明治4（1872）年、12才で鑄物師の修業に入り、安藤金得に深く師事して一切の鑄造技術を修得しました。太郎吉は金得に見込まれ、後事を託されるほどになりました。明治18（1885）年、太郎吉26才のとき、金得より伝授された技術と太郎吉独特の創意による研究技術を加え、鍋釜の他、各種風呂釜、並びに機械鑄物類の製造を本格的に開始しました。そして、明治42（1907）年に東海道本線岡崎駅近くに工場を新設しました。それが現在の本社工場です。そして、大正8年（1919）には服部鑄造株式会社を設立し、三州釜と名付け、その名声と共に日本で第1の生産額をあげ、販路は海外にまで及び岡崎主要生産物の1つとなりました。そして昭和16（1941）年に82歳で亡くなりました。

このように、安藤金得の青銅器鑄造の技術は、三浦作次郎により唐金鑄物組合（岡崎青銅器組合）の創設し全国に広がりました。また、服部太郎吉により三州釜として全国に広がりました。服部工業は現在も羽根町若宮30で創業されています。安藤金得の技術は大きく変わってはいますが、確かなつながりは見せています。

「愛知縣特殊産業の由来上」（東海地方史学協会・昭和56年）を参考にしています。